解説

藤元優子

著者のゴリー・タラッキー（Goli Taraghi）は一九三九年テヘラン生まれ。父のロトフォッラーは、自らの名を冠した『進歩（タラッキー）』誌の編集者で国会議員でもある裕福な人物であった。いつも机に向かい、物を書いていた父の影響で、ゴリーは早くから作家を志した。一六歳で渡米して、アイオワにある大学で哲学を学び帰国。政府機関で働いた後、テヘラン大学芸術学部で一九六〇年代から教鞭を執った。革命後はパリに生活の拠点を移すが、著作はペルシア語で行い、イランで刊行されている。

革命前からその名を知られた数少ない女性作家の一人であるが、作風は革命前後で大きく変化した。革命前の心理学的視点と哲学的思考に依拠した観念的傾向を脱して、革命後には、自分の過去の記憶や体験に基づくリアリスティックな作品が主流になったのである。このことについて作家自身は、異郷暮らしの不安が自分を過去の安定・安心に包まれた記憶に向かわせ、このような作品群を生み出したと語っている。

「父」は後者に属する作品で、まず短編集『散り散りの思い出』（一九九四年）に収められた。しかしその後、もう少し話を膨らませる必要を感じ、短編集『二つの世界』（二〇〇二年）に増補の上、再録された。本書の翻訳は後者を底本としている。『二つの世界』の序言には、「『散り散りの思い出』中の「シェミーラーンのバス」、「祖母の家」、「小さな友だち」と（「父」を含む）『二つの世界』の七つの短編は、一つの時代の連関する記憶を集めたものであり、将来、長編小説の章に振り分けることができたらと思う」と書かれている。

『二つの世界』について著者は、「二つの世界とは即ち、二つの存在法、二つの視点、誕生と死、過去と未来、想像と現実、子供と大人、伝統と革新、二つの地点、こちらとあちら、出発と帰還。他にはどうでしょう？　人間は矛盾と二元性に囚われているもので、二つの世界の間の往来と争いは誰もが経験することです。……（中略）……でも、私が過去の生活を書いた目的は、回顧録ではありませんでした。私は作家で、物語を書くのが仕事です。『二つの世界』の登場人物は、現実と想像の合体です。私は自分の言いたいことを言うために彼らを創造しました。それは、二つの世界の現実を様々に表現するために必要だったのです」とBBCペルシア語放送のインタビューに答えて語っている。

実際に二つの「父」を比較してみると、増補版では、後半部分のインド人英語教師のミスター・ガズニーにまつわるエピソードと、父の病気との闘いが詳細に描かれていることが分かる。主人公は、二人の生き様と死から、天国のような安心に包まれた家庭も、壁の向こうの過酷な現実社会と決して無縁ではないことに気づかされる。こうして彼女も、「不幸な出来事のことを何でもよく知っている」大人の仲間入りをしていくのである。

秀逸なのは、結末で語られる料理人ハサン・アーガーにまつわる後日談である。道路に変わってしまった昔のわが家の跡で一瞬視線を交わした主人公とハサン・アーガーの間に、数限りない思い出が浮かび、はかなく消えていく。このシーンによって、この作品は単なる子供時代の思い出話ではなく、人生の重みをしみじみ考えさせられる佳作となった。

タラッキー作品の他の日本語訳には、共に拙訳で、「わが魂の太母」（『すばる』二〇〇八年一二月号）と『天空の家―イラン女性作家選―』（段々社、二〇一四年）の表題作がある。